口承文芸研究

日本口承文芸学会

二〇一八年三月

第四十一号

【第四一回大会講演】
ペルーアンデスで『ワロチリの神々と人びと』に出会うまで
—ラテンアメリカのさまざまな言葉 …… 唐澤 秀子 1
私が出会ったアメリカの語り …… 末吉 正子 11
アメリカ先住民の口頭伝承から「因幡の白兎」を再考する
—レヴィ=ストロースによる分析 …… 川田 順造 20
【論文】
アイヌの動物変身譚における「第3の変身」について …… 北原 次郎太 29
北海道アイヌ口承文芸「人助け樹木神」について …… 安田 千夏 46
アイヌ英雄叙事詩におけるハヨクペの語られ方 …… 遠藤 志保 58
八戸城下の奥浄瑠璃 —新史料紹介— …… 阿部 幹男 66
説経と谷ノ者 —「せつきやうかるかや」、「中将姫御本地」から …… 内藤 久義 79
千葉県銅の浦におけるタイの食物禁忌 …… 山口 くるみ 91
疑似的な声の非人間的転回試論 ——ある「怖い話」の発生と流行にみる〈電承〉 …… 廣田 龍平 104
【研究ノート】
現代的な昔話の語りの場にみる語り手の実践
—— 青森県津軽地方のある語り手を事例として—— …… 斎藤 みほ 117
【第七一回例会報告】
「社会的・共=競演的でひろい悟り」へのアプローチ
—小学校教育史、国語科教育史との係わりから— …… 高木 史人 125
【第七二回例会報告】
禁止から尊重、奨励へ —奄美のシマ言葉の変遷 …… 酒井 正子 131
【第41回大会シンポジウム】「口承文芸デジタルアーカイブの課題と展望」
シンポジウムの目的と概要 …… 熊野谷 葉子 〔1〕
個人調査資料アーカイブ構築の方法と課題
—欧米・ロシアの口承文芸デジタルアーカイブを参考に— …… 熊野谷 葉子 〔3〕
アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブについて …… 安田 益穂 〔8〕
音声等を含む多様なデータベースの現状と課題 —人文情報学の立場から— …… 後藤 真 〔13〕
世界口承文芸アーカイブの提案 …… 樋口 淳 〔18〕
【書評】
河野眞著『ファウストとシンデレラ 民俗学からドイツ文学の再考に向けて』 …… 斧原 孝守 140
及川祥平著『偉人崇拝の民俗学』 …… 伊藤 龍平 144
野村敬子著『女性と昔話』 …… 竹内 邦孔 149
真鍋昌賢著『浪花節 流動する語り芸—演者と聴衆の近代』 …… 細田 明宏 154
【新刊紹介】 …… 159
【彙報】 …… 168

【第七二回例会報告】

禁止から尊重、奨励へ
——奄美のシマ言葉の変遷

酒井 正子

第七二回研究例会は、二〇一七年三月一一日に「♪シマグチの響きにふれてみませんか～東京での奄美シマウタ伝承」（都市語りの可能性②）と題して國學院大學でおこなわれた。

「都市語り」とは、野村敬子氏によれば「故郷を出た人々が、時代の変化の中でしなやかに生きながら、なおかつ故郷の言葉を忘れず、口承文芸や芸能によって都市で継承していく活動」である。二〇一五年の東京竹富郷友会に続き、今回は奄美シマウタ研究会と共催でシマウタ伝承をとりあげた。

東京ではここ数年、フロアと一体になってうたったり踊ったりするミニライブが活発で、若手唄者（うたしゃ・名人）が活躍し、本土の常連客もその支えとなっている。見方によっては歌遊（あそ）びの復活ともとれる状況である。また島・本土出身を問わず、熱心に島唄を習う人たちも多い。

当日は、吉野治子氏の昔がたり（岩倉市郎『喜界島昔話集』より）の後、酒井がシマ言葉の動向を概観した。「シマ言葉」とは、シマグチ・シマユムタ・シマムニなどといわれ、シマ（集落）ごとに流通している話ことば（方言）の総称である。

続いて東京奄美サンシン会（島唄教室）、および若手唄者の牧岡奈実・徳原大和・里朋樹の三氏による実演主体のプログラムが組まれた。学会員、奄美出身者、島唄ファンが多数来場、活発な合いの手のハヤシが聴衆からも掛けられ、最後は《ワイド節》《六調》を踊って賑やかにおひらきとなった。共通語とは異質の口承文芸世界を体感享受し、また意見交換する貴重な機会となったことを、関係各位に感謝申しあげたい。

サンシン会の本田よしの会主は「先祖が守ってきた世界に誇れるもの」として「島唄の心」をうたい継いでゆきたいと述べ、若手唄者は「東京で島唄をうたう時は、奄美の海山を思い浮かべ、ウヤフジ（先祖のカミ）を拝みつつうたう」とのことであった。また近年教室のお稽古は、コンクール用の難曲にとりくむ傾向が強くなっているとの指摘もあった。

いずれにせよ、奄美島唄は楽譜に書ききれない音程や装飾音をちりばめ、裏声や旋律のうねりも特徴的である。その歌心の核心はこれからも、直接人から人へ、対面的に伝授されてゆくことだろう。

本稿では、島唄を支える扉台骨ともいえるシマ言葉の動向について報告する。とくに日本復帰（一九五三年）後の方言禁止教育と島唄伝承の関わりに注目し、新たにみえてきた問題点も指摘したい。なお「奄美」とは大島のみならず奄美諸島全体を、「島」はislandとしての「島」を、「シマ」は島を構成する生

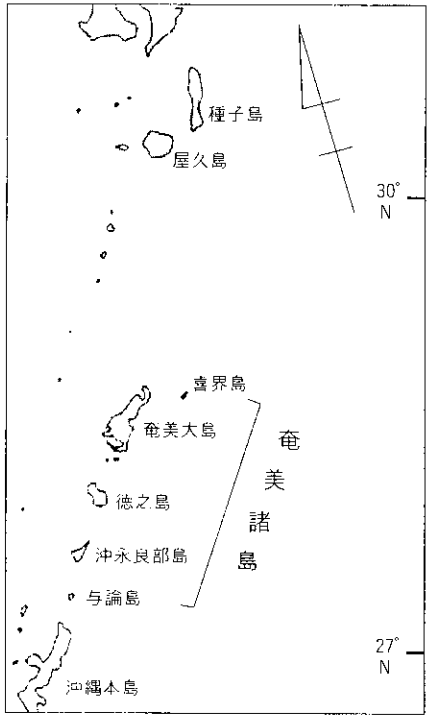
活・文化共同体の最小単位としての「集落」を、各々さして用いる。

1、「ドーナツの穴」現象

二〇〇〇年頃からの奄美大島の唄者のメジャーデビュー[1]と全国的認知は、奄美出身者の自己認識に大きな影響を与えた[2]。従来つきまとってきたコンプレックスを払拭し、島の固有文化に肯定的な若い世代を生み出しているのである。

しかし自由に島唄をお歌している若手に対して、複雑な視線も感じられる。日本復帰後の昭和三〇～四〇年代（一九五五～一九七四）に方言禁止教育を受け、シマの文化を否定的に捉えてきた世代だ。復帰とともに押し寄せてきた本土文化への憧れ、フォーク・ロックへの傾倒など、当時の風潮も大きく作用したに違いない。皮肉なことに、今になってシマ唄・シマ踊りが盛り上がっているのでちょっとやってみたいと思っても、自分の中に素地がない。気軽に手を揚げ踊りの輪の中に入ることができない、そういう人たちの存在を、細田正実（奄美シマウタ研究会）は東京の奄美出身者とつきあう中で知ったという。

伝統文化を体現する七〇歳以上の高年層と、肯定的な三〇～三〇歳代の若手の間に、ちょうどドーナツの穴のような欠落、シマの文化になじめない疎外された層が存在するのではないか。またその子供世代も、親が家庭内でシマグチを話さないため、習得の機会がなかっただろう。現在の「消滅危機言語」状態[3]を招いた背景・要因の一つとして、第二次大戦後のシマ言葉の動向に目を向けてみたい。



2、戦後の方言禁止教育の実態

さかのぼれば明治以後の近代国民国家形成期に、琉球弧（奄美・沖縄地域）では風俗改良運動（シマ風を改めさせる）や皇民化教育が押し進められた。とりわけ標準語励行のための方言撲滅・追放運動の厳しさは全国に例をみないといわれ、軍隊での苦労も大きかった。「方言札」等の罰則を伴う禁止教育については、沖縄で研究がすすんでおり[4]、奄美

も同様の状況にあっただろう。

さらに大正末～昭和の大不況（そてつ地獄）や鹿児島県の「独立経済」政策により、経済的困窮は極まる。一九二〇年代より大量の本土への出稼ぎ、移住が始まり、多くは阪神方面に向かった[西村、九九二、酒井、九九四、前田、二〇一〇]。

本土には出たもののことばの障壁は大きく、解雇や生活の困難に直面。「電話をとるのがこわい」「友人ができない」という苦労話が島においても流布された。そこでシマ言葉は良くないということで、方言禁止教育が「最優先課題」として推し進められたことは、周知の事実である。

しかし昭和二八年の日本復帰後もなお、方言禁止教育が強力におこなわれたことはあまり知られていない。方言を話すなという圧力は、戦前よりむしろ強かったといわれる。個人差・地域差はあるものの、まずはその実態を、体験者の証言の中にみてゆこう。

2-1、昭和二八（一九五三）年復帰前後――学校だけでなく、家庭・地域でも標準語を使う運動

☆小野寺ヒロミ（'42年沖永良部島生、'49～'58年学齢期）「滅びゆく〝ことば〟を訪ねて」（『たたかいのルポルタージュ』10）より

一九四六年、奄美群島は沖縄とともに行政分離され、米軍政府の統治下におかれた。本土との往来・送金・通商の禁止、物資の欠乏、言論・出版・集会の弾圧に抗して、激しい日本復帰運動がわき起こった。奄美群島二十二万の住民が一丸となり、四歳以上で99・8％の署名、断食、デモ行進等徹底した非暴力運動を展開。本土の郷友会とも連携し、陳情や集会を繰り返した。一九五三年一二月二五日、奄美は沖縄より八年余早く日本に復帰した。

小野寺は復帰運動のさなかの一九四九年に小学校へ入学し、標準語教育を受けている。当時教科書は教員が日本に密航し、命がけで運んできた。学校ではNHKの放送教育用のレコードを復唱。「方言で言えば」と断ってからでないと発言できない、方言を使った児童を先生に言いつける、という日常であった。

さらに日本復帰後も「晴れて日本人になれたのだから」と、沖永良部島では、学校だけでなく家庭・地域ぐるみで標準語をしゃべろうという運動が展開された。とくに上からの指令ではなく、教員が発案し、地域の会合に出向いて訴えた。本土への就職・進学、学力の向上を考えれば是非必要なことであり、子や孫の幸せのためなら、というのでどの集落も標準語教育にとりくんでいったという。小野寺は「方言がなくなることは、祖先から代々受け継がれてきた精神文化が消滅することである。心からうちとけて話すことができるのは方言だ。夫婦、親子の間までも共通語を使わなければならない、という理由がわからない」と述べている。

しかし復帰から二五年を経た一九七八年になっても、方言殺人事件まで起きているという報告は衝撃的だ。関西の飲み屋で

三八歳の男性が、店の従業員に「電話をからしてくれ」と頼んだところ、「日本語をしゃべらんかい」とからかわれ、かっとなって殺傷沙汰に及んだという。もとの方言では「電話借らちくれ（貸して下さい）」という丁寧な言い回しなのに、一生懸命日本語に置き換えてしゃべったところ笑われたのである。「そのことに彼は全身カーッとなる程の羞恥心を感じたのだろう。方言に対する罪悪感や羞恥心は奄美の人々がひとしく共有するもの、奄美の歴史の中で育まれ、つちかわれてきたものだと思う」と小野寺はいう。

奄美出身者はつい最近まで、本土で自分の出自を隠すことが少なくなかった。「シマ言葉は通じない、だめだ」というのがいつしか一島は（何でも）駄目だ、価値がない」という劣等意識に置き換えられ、染みついてしまったのではないだろうか。

ところで復帰とともに本土資本・情報が押し寄せ、シマの固有文化を軽んじる風潮は強まった。そうした中で昭和三〇～四〇年代まで、禁止教育は続いた。

2-2、昭和三〇年代（一九五五～一九六四）――厳しい禁止教育（体罰、方言札等）

☆本田碩孝（'43年徳之島生、'50～'62年島内在学）二〇一六「徳之島井之川・島口の位置覚書（1）」（南島研究』57）より

高校までは島で二重言語生活。学校では標準語、出るとシマグチを使用した。方言札、便所掃除、水の入ったバケツを持って廊下に立たせる、浜からの砂運び等の体罰があった。一九六〇年頃でも、方言を使ったらビンタ、げんこつがとんだ。本田は「このような生活を強いられることにより、私は方言劣等感を身につけていた。もっともまったく劣等感を持たない同級生もいることを後年知って驚いた。個人の受け止め方は様々だ。私は、なんでこんなきたない言葉を使うのか、こんな貧乏な所に生まれたのか、と思い続けていた。駄目だ、と繰り返し言われることで、そうした劣等感が育まれる」と述べている。

大学卒業後は、鹿児島県の学校教員として「方言を使うな」と教え、結果的に地域・島の文化追放、否定の教育を当たり前のように担ってきた。その罪悪感と、シマグチや地域文化の急速な衰退への危機意識から、民俗文化の聞き取りや民話の記録など、郷土研究を熱心に実践し、今日に至っている。

2-3、昭和三〇年代の子供達の日常会話――トン普通語

☆島尾伸三（'48年神戸生、奄美ハーフ。両親は島尾敏雄・ミホ。'55～'64年学齢期）一九九七「名瀬トン普通語」（『月の家族』晶文社）より

島尾が転入した昭和三〇年代の奄美小学校では、シマ・ユメタが禁止され、かといって正確な標準語を話せる先生もいない。先生たちの多くは鹿児島出身で、鹿児島弁が標準語のように話されてもいた。子供達の日常会話はもっぱら「トン普通語」であった。例えば、

「これ、ヤー（お前）の？」「チャー（そう）。ワン（俺）の」「カラセ（借して）？」「ガッパイ（泥棒）するなよ」

といった調子の、土地ことばが混じり合い変形された標準語である。

必要に迫られてこうした「中間的スピーチスタイル」が生み出され、田舎くさい標準語とでもいおうか、やや自嘲気味に「トン（いも）普通語」と呼んだのだろう。標準語に席捲されながらも、規範をずらしていく「ネオ方言」（真田信治）の生成は、地域のアイデンティティの発露として注目される。今日沖縄で流通しているウチナー（沖縄）ヤマトゥ口（グチ）も同種のものである。

こうした言語空間では、きれいな標準語はどことなく冷たく人工的な感じで、しかも「東京の大学を出たての若い先生が得意気に喋るので、あまり良い印象はなかった」「島尾、一九九七」。本土からの転校生が流暢な標準語をしゃべるのを、「カッコつけて」といじめやからかいの対象にされた、との報告もある［西村、一九九八］。

2-4、昭和四〇年代（一九六五～一九七四）――したいに緩和

☆花田光夫（'52年喜界島生、'59～'71年島内在学）二〇一六「新解釈による南西諸島語の再考察（3）」（個人刊）より

花田は「小学校の時に、今週の努力目標『学校では方言を使わないようにしましょう』を何十回言ったことか」と述べている。方言を使うと黒板に名前を書かれたり廊下に立たされたりした。元教員の回想によれば、喜界島では首にかける方言札が、昭和40年頃まで使用されていた[16]。しかし昭和四〇年以後は、方言禁止はそれほど厳しくなくなったという。

そして次項の昭和五〇年代になると風向きがかわる。すでにNHKが一九六二年より、そして民放は一九七六年よりTV放映を開始。テレビ等マスメディアが浸透して標準語の使用が当たり前の時代になる。また少子化、核家族化などにより、方言を使う環境が大きく後退。方言がなくなりつつあることへの危機感がむしろ台頭する。シマ言葉復活に向けて様々な取り組みが始まるのである。

次にその転換点、およびそれ以後の一九九〇年代に至る状況を探ってみよう。

3、昭和五〇年代（一九七五～一九八四）を境に
――禁止から尊重、奨励へ

3-1、転換期とそれ以後

西村浩子によれば、一九七五年ころ奄美大島総合社会教育研究大会で「方言を使おう」という提言がなされ、ある教育関係者は「時代は変わったものだ」との感慨を持ったという。また一九八〇年ころより、各島で島口島唄大会が開催されるようになり、学校でも「方言を使うように」と言われ始める。この頃が転換期である。子供たちによる方言劇や、地域の古老を講師

としたシマグチ講座もおこなわれている。

九九三年には、喜界町の社会教育行政施策として、「文化財の保存と活用」の中に、「方言伝承活動及び記録収集」という項目があげられている。学校・行政一体となった取り組みが始動しているのである［西村、一九九八］。

前田達朗によれば、一九七〇年代初頭から半ばころ、シマから都会に出てきた若者に方言が通じなくなった、という貴重な証言がある。ちょうど復帰後生まれの世代が高校を卒業する時期にあたる。神戸で、小さい頃父親に連れられて郷友の集まりに行ったある女性の話として、

なに言うてるか、さっぱりわからんで、宇宙人か思たわ。せやけど、シマから来る若いもんにも方言が通じんようになったって、言うてたなあ［前田、二〇〇二、四七］。

年配の島びとどうしシマ言葉で打ち解けている傍らで、シマから来たての若い人がきょとんとしている、という光景が日に浮かぶ。

一九九〇年代には「子供に通じない島ユムタ」と題した投書もみられる。

喜界島を出て四〇年余。中学生の甥が上阪し、よい機会だとばかり忘れかけていた島ユムタで話しかけたところ、教科書どおりの正しい標準語の返事が返ってきた。かえって自分の乱れた言葉を恥じた。喜ぶべきことかもしれないが、先祖が生み出した尊い方言文化を途絶えさせてよいものか［'95・9・8『南海日日新聞』投書欄］

と、複雑な心境が綴られている。

3-2、東京での動向――島唄教室、奄美語学校の設立

一九八〇年代には、島と呼応するように東京でも、出身者の間で島口島唄再興の気運が高まる。この時期に運動に関わった関玲子（奄美シマウタ研究会）によれば、一九八三年の日本復帰三〇周年記念に、島々の唄者を招いて「奄美島うた大会」をひらくことになった。その前段階として一九八二年より「島唄教室」が発足、以後朝崎教室、東京奄美サンシン会等として引き継がれている。一九八五年には「奄美語学校」が設立され、言語学の専門家を講師に、島々の出身者が方言比較などの研究をおこない、一九九〇年代まで続いた。

4、二〇〇〇年以降――シマ言葉復活の様々な試み

二〇〇二年より、大島教育事務局は「一校一島唄・島口運動」を重点施策の一つにかかげた。教育行政の大転換である［本田、二〇一六］。また同年より総合学習の時間を使って、地域の古老

を呼び八月踊などの郷土学習に取り組む小中学校も多い。ちょうど元ちとせはじめ唄者のメジャーデビューが相次ぎ、奄美島唄の全国的認知がすすんだ時期と重なる。

二〇〇六年、沖縄県は議員立法により、くとうば（言葉）＝九・十・八とあてて九月一八日をシマ言葉の日に制定した。翌年与論島が三月一八日をシマふとうばの日に定め（与論ではフトゥバと発音するため）、文化協会が提唱して奄美全域に広がった。「シマ言葉の日」には、文化協会（民間）、社会教育（行政）を中心に様々な取り組みがおこなわれている。島口島唄大会の他、島口川柳、島口議会、寸劇、漫談、わらべ唄遊びなど盛りだくさんで、奄美FMはほぼ一日中、シマ言葉で放送している。またことわざ暦、かるた、絵本、ラジオ体操や島口CD・DVDなどが制作されている。

二〇〇九年には消滅危機言語に認定され（注3参照）、二〇一四年より危機言語サミットが、八丈島→那覇→与論島と持ち回りで開かれている。

今日の状況は、昭和四〇年代に標準語教育を受けた世代には「隔世の感」があるという（'16-2-22「南海天地」）。それだけ日常の中でシマ言葉がうすれていく実感、危機感が強いということでもあるだろう。話者の高齢化もすすんでいる。「奄美（シマ）らしさ」へのこだわり、その「最後の砦」ともいうべき思いを、官民あげての運動の中にみることができるのではないだろうか。

5、まとめと今後の課題

以上、昭和二〇～四〇年代の方言禁止教育の影響を濃密に受けた世代とは、概ね昭和二〇（一九四五）年小学校入学（→昭和五〇（一九七五）年高校卒業くらいまでと想定できよう。これは一九四八年生まれくらいまで、概算で現在六九歳～六一歳の人たちである。大体六〇歳代を核に、その子供の世代（四〇歳代）まで影響は及んだと考えてよいだろう。はじめに「七〇歳以上の高年層と、二〇～三〇歳代の若手の間に、ドーナツの穴のような欠落が存在するのではないか」と述べたが、ちょうどその「ドーナツの穴」に相当する世代である。

試みに、唄者の登竜門である「奄美民謡大賞」の歴代の受賞者をみてみよう（表）。一九八〇年から毎年開かれているが、二〇一七年現在二〇～三〇歳代の台頭、四〇～六〇歳代の希薄（五〇歳代はゼロ）、七〇～八〇歳代の充実、という傾向がはっきりみてとれる。しかも一九九六年の元ちとせ以前と以後では様相が一変する。元は当時最年少（一七歳）の受賞であった。それ以前はすべて中高年で、該当者なしという年も多い。しかし元以後、彼女のウタに衝撃を受け中孝介が高校から島唄を始めるなど、若手が続々と参入し実力を伸ばしているのである。これから先、ベテランが去った後の空洞（ドーナツの穴）をどう埋めるか、島唄界にとって流動的な時代を迎えるかもしれない。進境著しい若手がその担い手として、重要な役割を果たすことになるだろう。

ともあれシマ言葉と島唄の動向は、ある関連性を持つことが示されたといえよう。

鹿児島から沖縄の間に位置する奄美の島々の文化的アイデンティティは、一括して論じることは難しい。その様相は動的かつ重層的で、島ごとに違う。しかしより大きな力と対峙するとき、まとまった集団として現れてくる場合がある。本土移住と復帰運動は、そうした共通の経験をもたらした。本土に出てきた後は例えば首都圏では「東京奄美会」という連合組織を形成し、奄美二世、三世という言い方も通用している。前田［二〇一〇］が指摘するように、その言語経験は移民やマイノリティと通底するところがあるだろう。「日本人」を強く志向しながらも、本土とは異質なダイナミズムを有する存在として、今後どのような独自性を発揮してゆくのか。「シマ言葉」の動向は、社会・制度的側面のみならず、文化的なアイデンティティの問題として重要である。また東京だからこそ、みえてくる側面があることにも注意したい。

注

（1）メジャーデビュー（本土の主要レーベルからのCD等の発売）の先駆けは一九九三年の中野律紀（RIKKI、日本民謡大賞受賞者）。九七年頃から本土で島唄ブレイクの予兆はあり、〇二年元ちとせ・朝崎郁恵、〇五年里アンナ、〇六年中孝介、〇九年城南海とメジャーデビューは続く。

（2）小川学夫「逆転したシマ唄観」（『南日本新聞』'17-3-17「論点」）によれば、奄美では長く「シマ唄は大して価値のない、ろくでもない唄」とみなす人が多かった。その理由として西洋音楽の価値優位、遊び人・怠け者の所行という見方、そして方言禁止による劣等意識の3点をあげている。劣等意識はつい最近まで残っていたが、一九七九年築地俊造が日本民謡大賞（民謡日本一）を受賞、八九、九〇年と受賞者が続いて（表参照）、大きく変わった。〇二年以後は「奄美の宝」と自信をもって言うようになっていった。

（3）ユネスコの二〇〇九年 "Atlas of the World's Languages in Danger" による。話者数や世代間伝承等を指標に体力測定をおこない、世界の言語を1消滅、2極めて深刻、3重大な危険、4危険、5脆弱の五段階に分ける。アイヌは2、八重山・与那国は3、八丈・奄美・国頭・沖縄・宮古は各々4と認定された。

（4）近藤健一郎［二〇〇八］など、制度や教育方法まで踏み込んだ検証がなされている。

（5）明治二（一八八八）～昭和一五（一九四〇）年まで、大島郡予算を県予算から分離独立させる変則的な経済政策。少ない税収で自給自足的な行政運営を強いられ、社会資本整備、経済不況対策、台風災害復旧等もままならず、島民生活は困窮を極めた。国庫補助金の支給にも格差があった。結果として日本資本主義の確立期に、県本土の産業基盤整備に莫大な資金がまわされ、奄美は産業の育成にも遅れを

生じたとされる［西村、九九：一四、一］。

（6）昭和一〇年代から昭和四〇年代はじめまで使用されていたらしい［西村、九九八］。

（7）二〇一七年九月には、文化財振興課が県庁内に「しまくとぅば普及センター」を開設、センター長に波照間永吉が就任した。シマ言葉は地域の伝統行事や古典芸能を支える大切な基盤であり、その全県的な普及と継承に取り組むとして教材の開発を急いでいる。

参考文献　本文中☆以外

狩俣恵一ほか　二〇一七『しまくとぅばルネサンス』沖縄国際大学公開講座委員会
近藤健一郎　二〇〇八『方言札――ことばと身体』社会評論社
座安浩史　二〇一七『ウチナーヤマトゥグチの研究』森話社
酒井正子　九九四「本土（ヤマト）から運ばれた唄――奄美・徳之島の〈紡績唄〉とその背景」『湘南国際女子短期大学紀要』2
西村雄郎　二〇〇六『阪神都市圏における都市マイノリティ層の研究～神戸在住「奄美」出身者を中心として～』社会評論社
西村富明　九九二『奄美群島の近現代史　――明治以降の奄美政策――』海風社
西村浩子　九九八「奄美諸島における昭和期の〝標準語〟教育」『松山東雲女子大学人文学部紀要』6
前田達朗　二〇一〇「〝経験〟としての移民とそのことば――「奄美人」とシマグチを事例として」『ことばと社会』11～12号　同編集委員会

（さかい・まさこ）／川村学園女子大学名誉教授）

奄美民謡大賞、日本民謡大賞 受賞者
（2017年7月現在）

☆20代3、☆☆30代8、＊40代2、50代ゼロ、＋60代4、＋＋70代5、無印80代6
（年代は概算）　――該当者なし　△故人

回	年（西暦）	受賞者名	
38	平成29(2017)	平田まりな	☆
37	28	森田 美咲	☆
36	27（2015）	中 はずみ	＋
35	26	△竹島 信一	＊
34	25	別府まりか	☆☆
33	24	――	
32	23	前山 真吾	☆☆
31	22（2010）	里 歩寿（16歳で受）	☆
30	21	川畑さおり	☆☆
29	20	――	
28	19	山下 聖子	☆☆
27	18	永 志保	☆☆
26	17（2005）	直田ハツ子	
25	16	△皆吉佐代子	＋＋
24	15	中村 瑞希	☆☆
23	14	牧岡 奈美	☆☆
22	13	中島 清彦	＋
21	12（2000）	――	
		（中 孝介新人賞☆☆）	
20	11	松山美枝子	＋
19	10	福山 幸司	＋
18	9	――	
		（里アンナ新人賞☆☆）	
17	8（1996）	元ちとせ（17歳で受）	☆☆
16	7（1995）	――	
15	6	中山 和子	＋＋
14	5	――	
13	4	――	
12	3（1991）	森山ユリ子	＋＋
	1990	中野 律紀　日本民謡大賞	＊
11	2（1990）	当原ミツヨ	＋＋
	1989	当原ミツヨ　日本民謡大賞	
10	平成元	――	
9	昭和63(1988)	――	
8	62	△清正 芳計	
7	61	――	
6	60（1985）	西 和美	＋＋
5	59	安原ナスエ	
4	58	――	
3	57	△泊 忠重	
2	56	――	
1	55（1980）	坪山 豊	
	1979	八築地俊造　日本民謡大賞	

［セントラル楽器HP、指宿正樹］作成：酒井正子

注）H16より出場者200名に迫る。H20、21、25は200名を越え、H21より地区予選実施。